

平成22年度 仙北市児童・生徒の読書感想文コンクール

角館図書館後援会主催の平成22年度読書感想文コンクールが行われ、仙北市内の小・中学校から合わせて197点の応募がありました。2月8日、各小中学校の先生と図書館後援会員によって審査会が行われ、応募作品の中から高橋紫苑さん(角館中学校3年)の「太宰と私」が最優秀賞に選ばれました。(読んだ本:「女生徒」太宰治 著)

また、2月25日、仙北市総合情報センターで表彰式が行われ、入賞した皆さんへ高橋雄七後援会長より賞状と記念品が贈られました。



最優秀賞
作品

『太宰と私』

高橋 紫苑

今日も頭痛がする。起き上がる気力がわかない。その原因が何なのか、考えるのも面倒くさい。とにかく、眠りたい。どうしてこんなに疲れているんだろう。どうしてこんな気持ちになるんだろう。

太宰治の「女生徒」に出会い、はっとした。時代は違えど、まるで自分の気持ちを代弁しているかのよう。このやりきれない感じを。

どうしてみんな毎日笑っていられるんだろう。他人との関わり方が、考えれば考えるほど分からなくなる。自分と他人を比べれば比べる程、悲しい気持ちが胸をふさぐ。傷つきたくなくて、気を遣って話したつもりが裏目に出たり、思っていることが相手に伝わらず誤解されたり。間の悪いことは、続く。だから、人と関わりたくない。でも、孤独は嫌。煩しいことが、頭の中いっぱい支配して、今日もまた、同じ朝を迎える。太宰も、こんな朝を迎えたことがあるのではないだろうか。

この物語の主人公と、私の気持ちは、不思議なくらい合致している。自分だけが、他人から浮いている気がしていたけれど、「女生徒」もまた、同じように思い悩んでいたことを知り、安堵する。半世紀以上も前に書かれたこの小説が、今の私と重なる。他人の目気がなったり、自分自身をとんでも嫌いになったり、生きていく気力がわかなかったり。毎

日、困った気持ちに振り回される。年を重ねるにつれ、ずるくて、自意識過剰で、周囲から浮いてしまうことを警戒しながらも、他人とはひと味違う自分でありたくて、なのにそれがうまくいかずに落ち込んだりスネたりしてしまふ。そんな「私」であり、「女生徒」であることが、この物語に詰まっている。私たちは、誰もが暗い部分や弱い部分を持って生きている。いじけたり、くよくよしたり、逆に虚勢を張ってみたり、悪ぶってみたり。そんな自分を隠すために、みんな、明るいふりをする。元気なふりをして、前向きなふりをする。本当は情けない、自分自身のために。

平成の便利なこの時代に、昭和に書かれたこの作品を、古くさいと思わず、身近なものに感じられるのは、太宰治の「人間性」が影響しているのではないだろうか。年も性別も全く違う人間に変身し、なりきる様子は他人を注意深く観察する力がなければできない事だ。それだけ太宰自身も、他人の「目」を気にし、怯え、自分という人間を隠して生きてきた人だということが分かる。果てしなく悲しく暗い人生を歩んできた太宰の文章には、本物の魂が込められている。自分が隠したい暗い部分や弱い部分を、そのままストレートに突きつけられているからだ。それはきっと、太宰自身がこの暗さや弱さをたくさん抱えていたからこそ、こんなに近く感じられるのだと思ふ。傷つきたくないし傷つけたくないから、道化

写真家 千葉克介さん 市へ写真集を寄贈

北東北を中心に、名所を数多く撮影してきた写真家、千葉克介さん(角館町)からこの度、市へ写真集を寄贈していただきました。

今回、寄贈いただいたのは千葉さん自身の作品集「北の彩り」第3集。すばらしい写真が数多く納められています。「仙北市の観光等に役立てて欲しい」と門脇市長に手渡されました。

市では仙北市の美しい風景が収められた写真集を、観光PRに活用して行く予定です。



日本郷土民謡協会表彰 秋田生保内支部から3人が受賞

この度、日本郷土民謡協会から、秋田生保内支部の皆さんの長年にわたる芸能活動が認められ、草薨龍佐巳さん(田沢湖)に功労賞が、高橋達夫さん(角館町)、高橋効子さん(角館町)に有功賞がそれぞれ贈られました。



左から、高橋達夫さん、草薨龍佐巳さん、高橋効子さん

読書感想文コンクール審査結果(敬称略)

《最優秀賞》高橋紫苑(角館中学校3年)
 《優秀賞》仙波吏(中川小学校1年)・佐々木茉祐(中川小学校4年)・大山陽介(神代小学校5年)
 《入選》〔小学校低学年の部〕鎌田匠人(角館小学校1年)・安杖凌(角館小学校2年)・喜古里美(角館小学校2年)・高橋月帆(白岩小学校1年)〔小学校中学年の部〕佐々木唯衣(角館小学校4年)・藤村起裕(神代小学校4年)・太田創(白岩小学校4年)・草薨言(白岩小学校4年)〔小学校高学年の部〕鈴木めぐみ(中川小学校6年)・藤田美羽(角館小学校5年)・宮崎拓(角館小学校5年)・米澤日奈子(角館小学校6年)〔中学校の部〕佐藤結衣(生保内中学校2年)・畠山若那(生保内中学校2年)・藤井彩華(生保内中学校3年)・田中優(西明寺中学校2年)

を演じていた。人と接するのを恐がっていたくせに、人間をとて愛しく思っていたと思う。心の痛みをたくさんたくさん抱えていた分だけ、他人の辛さ、悲しさ、苦しさを自分のことのように感じられた人だと思ふ。臆病で繊細すぎた波乱万丈の彼の人生。想像力が豊か過ぎて、他人の反応が恐しかった太宰。今の私達に大きく欠けているのは、その「想像力」だと思ふ。自分の言動や行動に対して、他人がどう感じるかを想像できれば、いじめも差別も無くなるのに。

自殺未遂をくり返す中で、残された作品の数々。最期はついに玉川で自らの命を絶ってしまう。そんなギリギリの状態だったからこそ、飾らず、ありのままが描かれているのだと思ふ。

太宰の書く作品は、暗くて重くて苦い、そ

してひねくれている。でも、読み終えた後は不思議と気が楽になっているのだ。寂しくて悲しいのが人間で、何も恥じることはないんだと胸を張れるのである。人間の弱さを知っている太宰の書く文章は、強く共感するし、何より私達を「前向きに生きてみよう」という気にさせる。もし生きる事に疲れて、他人や自分を傷つけるほど辛い思いを抱え苦しんでいる人がいたら、ぜひ太宰を読んでほしい。そして太宰からの魂のメッセージを受け取ること、その人にとっての「生きる希望」を見つけることができるであろう。それが、作家である太宰にとって一番の喜びだと私は思う。

疲れて重かった体が少し軽くなる。もう弱い自分を否定しなくてもいいじゃないか。いつの間にか、頭痛は止んでいた。